

【フィールドワーク通信】

「カンボジア人の死生観と伝統儀礼 —カンボジアの盆行事プチョム・バンを中心に—」

横山 未来 (早稲田大学文学研究科考古学コース)
チュン メンホン (カンボジアユネスコ国内委員会)

カンボジア人の生活の中には仏教や民間信仰などと結びついた様々な伝統儀礼が存在するが、その中でも正月およびプチョム・バンといわれる盆行事は特に重要である。この時期は仕事も休みになり、多くの人々が帰省する。正月が新年を祝う行事であるのに対し、プチョム・バンは死者・先祖供養の祭で、毎年陰暦の10月下弦1日(満月の翌日)から15日(新月)までの半月間行われる。下弦の14日までをカン・バン(កងប្រណាំង)と言い、最終日の15日を特にトゥガイ・プチョム・バン(ព្រៃប្រណាំង)と言って、その前後の日を含めた3日間が連休となる[アング・プリアップほか2019:190]。盆には閻魔大王(ヤマ)が餓鬼であるプラエト(ប្រាត)を地獄から解き放ち、それぞれの出身地に戻して、腹一杯食べさせると信じられている[同上:190]。そのためこの期間人々は料理を作って寺に持っていき僧侶に寄進する(図1)。また、持参した米は寺に並ぶ鉢に少しずつお供えする。これはラープ・バート(លាបបាត)と呼ばれる儀礼で、最後の鉢には手で米を入れるが、自分の先祖以外の身寄りのない死者へも食事を分け与えるという意味合いがある(図2)。この期間中に餓鬼は7ヶ所の寺々を回って家族や子孫を探すが見つけられないときは、家族・子孫が回向した功德を受けることができず、それを呪って祟ると一般的に信じられていることから[同上:191]、多くの人々は1つの寺院だけではなく複数の寺院を訪れ、儀礼を行う。また、夜には僧侶は経を唱え、人々はもち米を炊き団子状にしたバーイ・バン(បាយប្រណាំង)を寺の周囲のあらゆる方向にばら撒いて、餓鬼に食べさせる[同上:191]。特に最終日のトゥガイ・プチョム・バンには盛大な儀礼が行われるとともに、地域によっては先祖を送り返す儀礼として、バナナ木で作った船に米などの供え物を載せ、日が落ちてから川に流すところもあるという。

プチョム・バンと同様の儀礼に関する記録はアンコール時代から見られる。9世紀の碑文(K.279)にはスラータ(ស្រាតា)というインド由来の儀礼に関する記述があるが、これは亡くなった先祖に対してバーイ・バンのような団子状の米を供える習わしである[Monier 2003:1097]。また、16世紀末頃のサッター王の碑文(IMA3)にはトゥヴィア・トス・バン(ព្រៃស្រាតា)といわれる儀礼について記されている[Krassem 1984]。トゥヴィア・トス・バン(ព្រៃស្រាតា)は、「トゥヴィア・トス」がサンスクリット語で数字の12を表すことから、12日目に行う盆行事のことを指す。

今日まで伝わるこのような伝統儀礼は、カンボジアにおいて古代より存在する死生観に基づく慣習であると考えられる。アンコール時代には、王は死後、自身の崇拝する神々と融合した諡号が与えられ、極楽浄土において生き続けると考えられていた[ブリュノ 2008:247]。12世紀前半にスールヤヴァルマン2世が建立したアンコール・ワット寺院では、第1回廊の南壁面において王の生前の姿(スールヤヴァルマン2世軍の行進の場面)に続き、天国と地獄のレリーフが見られる(図3)。南はクメールの伝統的方位で閻魔大王(ヤマ)の方角であり、死後の世界に対する信仰が表現されている。さらに、13世紀後半に大乘仏教を保護したジャヤヴァルマン7世が建立したバンテアイ・チュマール寺院は彼の息子のための菩提寺とされるが、この王の治世には『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』に基づく観音菩薩の信仰が盛んである。観音菩薩は西より来たりて地獄に落ちた人々を救済し、天国へ導くと信じられており、バンテアイ・チュマールの西外壁には千手観音のレリーフが施されている(図4)。また、アンコール地域で同王が建立したタ・ネイ寺院にも観音菩薩が地獄から人々を救済する様子が描かれたペディメント(破風)が残る(図5)。

このように、歴史的な痕跡からもカンボジアにおける死生観は古来より引き継がれ、そうした信仰に基づく伝統儀礼が今日においても継承されていることがわかる。伝統的な信仰のもとにプチョン・バンは現在のカンボジアにおいて最も重要な伝統行事のひとつとして生き続けている。

なお、本稿は2022年9月のカンボジア調査の際、共同執筆者であるカンボジアユネスコ国内委員会のチュン・メンホン氏のご厚意によりコンボン・チャム州の寺院におけるプチョン・バン行事に参加させていただいた経験に基づき執筆いたしました。

引用・参考文献一覧

Boisselier, Jean

2008 “STUDIES ON THE ART OF ANCIENT CAMBODIA, TEN ARTICLES BY JEAN BOISSELIER, Translated by Natasha Eilenberg and Robert L. Brown eds., Phnom Penh: Reyum

Krassem, Mahā Bidūr

1984 “INSCRIPTIONS MODERNES D’ANGKOR” (Nouvelle preface de Saverous POU) Paris: Cedorek Monier, Monier-Williams

2003 “Sanskrit-English Dictionary” (E. Leumann; C. Cappeller and other scholars eds.) New Delhi: Asian Educational Service.

アング・チュリアン, プリアブ・チャンマーラー, スン・チャンドゥップ

2019 『カンボジア人の通過儀礼』(吉野實訳). 東京: めこん.

上田広美, 岡田知子編

2006 『カンボジアを知るための60章』東京: 明石書店.

ブリュノ・ダジャンス

2008 『アンコール・ワットの時代一國のかたち・人々のくらし』(石澤良昭・中島節子訳). 東京: 連合出版.

マック・ブン

2021 『カンボジア中世史 カンボジア・シャム・ベトナム民族関係史 (1594-1720年)』(石澤良昭・佐藤恵子訳). 東京: めこん.



図1 食事の寄進 (筆者撮影)



図2 ラープ・バートの儀礼（筆者撮影）



図3 アンコール・ワットの天国と地獄（筆者撮影）



図4 バンテアイ・チュマールの千手観音（筆者撮影）



図5 タ・ネイの観音菩薩（筆者撮影）